



このコーナーでは、JVIA会員企業の方に、PRのポイントとして「わが社のいちおし」をお聞きし、その企業らしさの秘密に迫ります。今回は金属加工メーカ、株式会社中村製作所です。

株式会社中村製作所

代表取締役社長

山添 卓也

【経歴】

2000年3月大阪産業大学工学部卒、2000年中村製作所入社。2001年12月社長。趣味はサッカー、子供のころからサッカーに夢中になり、名古屋グランパスユースのセレクションを受け、最終選考まで残ったが、入団はかなわなかった。三重県出身、40歳。



株式会社中村製作所

所在地

本社

〒512-8061 三重県四日市市広永町1245

■ 連絡先：TEL：059-364-9311 FAX：059-364-8836

■ 代表者：代表取締役社長 山添 卓也

■ 従業員：60人

■ 売上高：6億1300万円（2017年6月期）

■ 創業：1914（大正3年）

■ 設立：1969（昭和44年）

■ 資本金：2000万円

■ 事業概要：精密部品加工、産業機械部品加工、工作機械部品加工、チタン製印鑑

中村製作所は大正時代に地場産業の漁網編み機メーカとして創業した老舗企業である。工場を戦火によって失い、一時、休眠したが、再興後、工作機械の部品加工に着手。オイルショック、リーマンショックなどによる痛手を被ったものの、業態を変化させながら今日に至っている。近年では自社ブランドのチタン製印鑑「サムライン」を開発して販売を開始、また航空宇宙や医療、陶器関連など様々な分野に加工技術を生かしつつある。

◆大正3年に漁網編み機メーカとして創業◆

中村製作所は103年前に現在の山添卓也社長の曾祖父にあたる中村勇氏が創業した。当時の四日市は漁業が盛んで、漁網編み機のメーカがたくさんあった。同社も漁網編み機メーカとして創業した。現在も四日市には世界トップレベルの編み機メーカがある。「稲葉三右衛門さんという人が、私財をなげうって港を整備して漁業が盛んになり、四日市が発展したと小学校では必ず習います」（山添社長）。

しかし、時代の流れとともに多くの企業が漁網編み機の製造から業態を変えていった。同社もその一つである。中村製作所は漁網編み機以外にアパート経営も手がけていたが、第2次世界大戦で焼夷弾による四日市の空襲にあい工場の大半が焼けてしまった。賃貸アパートもほぼすべて焼失してしまった。

その後、再建もままならない状況で、登記上の中村製作所は、存続していたものの実際は休眠状態となっていた。それを現社長の祖父の中村勇夫氏が1969年に再興する。勇夫氏は工業高校を出た後、いろいろな会社で丁稚奉公し、その後もともと漁網編み機メーカがあった土地に株式会社中村製作所を設立した。

当時は四日市のコンビナートが盛況だったこともあり、三菱化工機の機械部品加工を手がけた。ところが、オイルショックが起こり、仕事がなくなってしまった。「たまたま祖母の弟が泉鑄造という鑄物工場を営んでいた伝手（つて）で大手の工作機械メーカを紹介していただきました」（同）。

そこから2008年のリーマンショックまではその工作機械メーカの部品加工の仕事を中心にこなしていた。1978年には工場を四日市の街中から移転して、泉鑄造が吹いた鑄物を加工するなど、工作機械の部品加工を本格的に手がけるようになった。



本社

「今年は四日市市政120周年ということもあり、弊社の生い立ちなどの資料を基に、四日市の産業は漁業からコンビナート、そして半導体へと移り変わり、それに伴って製造業も、漁網編み機から工作機械など、今はいろいろな仕事をやっている。120年の歴史の中でもすごく変動の激しい中で生きてきたというような話をさせていただくことが多いのです」(同)。

◆リーマンショックで売上高9割減◆

大手工作機械メーカーと「親子関係のような形で部品加工をやっていた」(同) 同社だが、現社長の祖父の勇夫氏が亡くなり、1992年に父の勝美氏が社長に就任した。その父も2001年に亡くなった。卓也氏が大学を卒業して1年目のことだ。親会社の工作機械メーカーで修行していた卓也氏が急遽、中村製作所の社長に就任した。

工作機械の部品としてスピンドルなどを手がけていた。同社のロゴは中村製作所の「中」をもじったスピンドルを表現している。山添社長は「工作機械の心臓部を触れる企業はそうあるものではない。我々は技術的なイニシアチブを握っていると父がよく言っていた」と記憶している。確かにこの分野は1000分の1mmよりさらに細かい領域の高精度加工が要求される。スピンドルなど回転するところはだいたい高精度加工の技術が要求されるものが多い。



2001年は米国で同時多発テロが起こった年で、「そのせいもあってか、仕事量がガクッと減りました」(同)。さらに当時は従業員が20人くらいいたが、「父が亡くなってすぐに私のような若造が社長をやるということで、退職されたりして、私は社員11人からのスタートでした」(同)。だが、新社長就任後も取引先の工作機械メーカーの支援により、売上高も増え、社員数も30人ほどに増えていった。

しかし、2008年9月に米国の投資銀行、リーマン・ブラザーズ・ホールディングスの破綻に端を発して、世界的金融危機が発生した、いわゆるリーマンショックによって苦境に立たされる。「工作機械業界の仕事量はリーマンショックで半減したといわれているが、まずは内製化ということで、私たちの仕事のほとんどが内製化されました」(同)。

具体的にはリーマンショックで90%の仕事がなくなり、残った仕事に対してコストダウン20%の要請があった。「当時、詳しい経営のことは分かっていなかったにしても20%のコストダウンは、ある意味の首切りみたいな形だと思った。今まで育てていただいた恩はあるが、1社だけに頼った経営はしないでいこう」(同)と考えた。

そこで山添社長は「自分なりに経営の考え方としては1社で2割を超えるお客さまは持たないようにしよう、できるだけいろいろな業種のお客さまを持つ」という取り組みを始めた。だが、いきなり仕事を探しに

いってもすぐに見つかるわけではない。「とりあえず、手慣れた工作機械業界の各社を訪問して、数社から仕事を獲得することができ、何とか売り上げが戻ってきた」。工作機械は設備投資に関係するので、山谷が激しい業界だ。「山谷の少ない業界を探していこう」(同)と、産業用モータなどの仕事を増やし始めた。

それでもリーマンショックから2、3年は毎年赤字だった。売り上げ9割減からいろいろな会社の仕事を増やしていきながら、1年目に5割くらいに戻し、2年目に7割くらい、3年目でやっと元の売り上げに戻った。しかし利益率が低く、3年目も少しの赤字が出た。

2008年度の売り上げが5億円ほどだったが、2年で1億5000万円くらいの赤字を積み上げた。「私が引き継いでから7、8年で、1億円くらいの利益を上げたが、一気に赤字の方に触れた。自分が継いだ時よりもさらにマイナスの方から再スタートした。これがリーマンショック当時の状況です」(同)。

◆『空気以外はなんでも削ります』◆

同社はリーマンショック後、工作機械関連一辺倒から受注先の多様化を図ったが、必ずしも順調に推移したわけではなかった。例えばソーラーパネルを切断するワイヤソーという機械の部品を手がけ、売上高の2割近くに達したこともあった。だが、中国のバブルがはじけて一気になくなった。また建設機械に使う油圧シリンダの部品加工の仕事をやりはじめ、1年半余りで、売上高の1割5分くらいになった。これも鉱山資源のバブルがはじけてなくなってしまった。

そうした中で、定着したのが半導体製造用のエッチング装置部品である。4、5年前から取り組み、チタンを扱うようになった。「勝美前社長が生前に誇らしげにつぶやいた『うちは何でも加工できる。空気以外なんでも削るくらいの気持ちだよ』20数年前に勝美前社長が米航空宇宙局(NASA)に支給されたインコネルからH2ロケットのバルブの部品を加工したときのことだ。難削材のチタン加工により、前社長の言葉がまたひとつ現実となった。

卓也社長は大学で情報システム工学を学んでいたもので、会社に入って最初は何をしたいのかわからなかった。その時に父からホームページをつくってくれといわれた。父に会社のキャッチフレーズをどうするか聞いたら、『空気以外はなんでも削ります』というのをに入れてくれといわれた。社員に聞くと「こんなの恥ずかしい」と言われた。

「でも後々、このキャッチフレーズが生きてきました。会社の歴史とは、と考えた時に、漁網編み機からコンビナート関連、それから工作機械、ずっと変化に挑戦してきて、父もロケットの部品加工までやった。そして今難削材のチタンを手がけている。さらにあとでお話しますが、チタンを使った印鑑や鍋の蓋に挑戦しています」(同)。

「余談になりますが、もう一つ言うと、湖池屋さんの『三角形の秘密はね』で有名なポリンキーというお菓子の生地を三角形に切り落とすローラは当社が作っていた。当時、湖池屋さんから『三角形の秘密は御社が握っているのだから言うてはだめだよ』といわれました。そういうこともあって父はチャレンジする会社という意味でこのキャッチフレーズを考えたと思います」(同)。

◆エッチング装置部品で真空業界に参入◆

エッチング装置のチタン電極の加工に挑戦したのもそういった背景があった。「どこもやらないということだったが、当時は知識もなかったので、ともかくやる!という気持ちだけの問題でしたね。だけど後で知ると、すごく不安なことがたくさんあったのです」(同)。工具費用がとても高い。材料のキロ単価も鉄の50倍するのに、加工単価は2~3倍だった。

そのハイリスク・ローリターンで、だれもがリスクを取らないというところに、山添社長は「我々は知らないということもあったけれども、チャレンジしないといけないという気持ちだけでまず入ってしまった。そして職人さんたちは父から『逃げるな』と言われ続けてきた人が多かったせいか、一緒になってチャレンジしてくれた。おかげで何とか形になり、今も仕事は売り上げの10~20%で推移している。これが真空業界に入るきっかけになったと思う」。

その結果、現在の業務内容は工作機械と産業モータ関連がそれぞれ30%程度、半導体製造装置関係が約20%。半導体関連はエッチング装置以外に真空ポンプ部品や装置のアルミ部品加工、真空チャンバなどに広がっている。そのほか遊園地のアトラクションやゴンドラなどの部品加工も手掛けている。

それ以外も燃料電池自動車や燃料電池フォークリフトの燃料(水素)タンクの入口と出口に使われる口金、吸入口と排出口をアルミ塊から削り出して製造している。また航空機関係も少しずつ増えており、「ジェットエンジンのブレード、エアバスのロールスロイス製エンジンの試作をやらせていただいた」(同)。

◆航空宇宙分野にも進出◆

東海3県が航空機関連産業の集積地を目指しており、四日市市もこの分野で頑張っている。同社もいろいろなどころからの仕事を少しずつ手がけて、試作部品やエンジンを加工するための治具の加工に取り組んでいる。同社は四日市市から手を上げてくれといわれ、アジアナンバーワンクラスター経済特区に工場が認定された。設備投資費用が国から1%利子補給を5年間受けられる。

三重県も中小企業の連携によって新しいものをつくりだそうとしてい

る。2015年4月に三重県企業国際展開推進協議会に航空宇宙部会を立ち上げ、海外企業との商談、取引成約に向けた取組を開始。また米国とのビジネス交流では日本貿易振興機構(ジェトロ)の地域間交流支援(RIT)事業も活用することで、海外企業との企業間ネットワークづくりや商談などを進めている。

山添社長はRIT事業や「みえ・航空宇宙産業推進協会(MASIP)」に参加し、航空機の勉強をしている。どちらも三重県に航空機の部品加工を持ってこようという取り組みだ。すでに航空機関連部品を手がけているため、「四日市市や三重県から声をかけていただく機会は多くなりました」(同)。

同社は宇宙ロケット発射台のバルブなど宇宙関連にもかかわっている。またPDエアロスペース株式会社という愛知県で民間ロケットを開発している会社を支援している。「PDエアロスペース(株)は宇宙旅行ができる宇宙船型の民間ロケットを開発していて、私たちはそれを追尾するアンテナをつくらせていただいたり、パルスジェットエンジンという新しいエンジンの開発に取り組んだりしている」(同) そうだ。全日空とHISが2023年までに宇宙旅行の実現を計画し、昨年からPDエアロスペース(株)を支援している。まさに「下町ロケット」の力である。

同社は宇宙だけでなく、海にも挑戦している。イージス艦に搭載するモータのケースを造船会社から受注した。「発電効率を上げるために、高精度の加工が必要ということで、私たちが設計段階からやらせていただきました」(同)。

陸海空と多様な部品加工を手掛けるようになった同社だが、「本当は1社と取引をしている方が楽ですが、業種によっては何がどうなるかわかりません。そういうことを考えたらいろいろなことにチャレンジしていかないといけないと思います」(同)と、リーマンショックの経験から学んだようだ。

◆いちおしはチタン製印鑑「サムライン」◆

前に触れたように、同社はエッチング装置の電極製造で、難削材のチタン加工のノウハウを取得した。ここから派生した製品がチタン製印鑑「SAMURA-IN(サムライン)」である。「わが社のいちおしは?」と聞くと、山添社長は即座に「サムラインです」と答えた。ブランド名はイタリア語で「削る」を意味する「MOLATURA」、自信の自社製品である。

形が普通の印鑑と異なる。握る部分の中央に向かってへこませたものと太らせたものの2種類ある。「握りやすくて」(同) そうだ。値段は実印4万8000円、銀行印3万8000円、認め印2万9000円。凹凸の印鑑を合わせると隙間なくびたりと収まるそうだ。この形状により2015年度の経済産業省グッドデザイン賞を受賞した。

この印鑑の名称は「印鑑を押す瞬間、あたりが静かになり一瞬時間が止まるような感覚になる。たとえば大事な契約書、最後の印を押すだけの行為がとても神聖に思える。侍が鞘から刀を抜く時のように、大切な場面向き合う心を凜と引き締める」というところから侍と印鑑を合わせたという。これが2015年の日刊工業新聞社ネーミング大賞を受賞した。

テレビ東京の人気番組「Youは何しに日本へ?」でハンコ大好きと紹介され脚光を浴びたフランス人の元フィギュアスケート選手でモデルのロマ・トニオロさんにもこの印鑑をプレゼントした。「印鑑好きの彼がうちの印鑑がほしいと言ってくれましたので。そのかわり、ロマ君にサムライをPRしてねとお願いしました」(同)。

いろいろと話題の多いサムライだが、印鑑を見た人がチタン加工技術の評価し、チタン加工の仕事が舞い込むといううれしい副作用もあった。「潜水艦のモータをつくりたいのだけれど、チタンの300φ(直径300mm)の塊を削り出してほしいという話がきて、加工した」(同)。

また大腿骨や脊椎インプラント用のねじが欧米規格なので小柄なアジア人でははみ出してしまふ。アジア人にあった大きさで、手術が短時間ででき、抜けないチタンのねじができないかとの要望が寄せられた。「先生方が印鑑をご覧になって、みえ医療コンソーシアムに入ってくれないかといわれ、福島県郡山市で開かれたメディカルクリエイションふくしまに出展しました」(同)。

サムライは印名を掘るのに1時間ほどかかる。現在は旋盤に砥石を付けて加工しているが、量産になったらマシニングセンターで削ることを検討している。「印鑑自体の実益はこれからというところですが、印鑑を始めたことにより、潜水艦や医療関係の話が来るなど、連携することによって新しいものを生み出すという、すごく意味のあることをもたらしてくれた」(同)。



印鑑「SAMURA-IN (サムライ)」

◆伝統工芸の万古焼とも連携◆

同社が絡んだ連携事業がもう一つ進んでいる。四日市市の代表的な地場産業に万古焼(ばんこやき)がある。耐熱性に優れており、土鍋の国内シェアは7~8割といわれている。万古焼は生誕300年といわれる伝統工芸で、昔は300社あったのが今は60社ほどになっている。

「工作機械で培った現合という技術がある。私たちは陶器を削ることはまずありえないのですが、この事業ではステンレスの蓋と陶器の部分を削って、ぴったり合わせて無水鍋を作り、トマトなどの野菜を入れて完全無水のカレーを作ったりしています。連携している友人の万古焼は四日市で1社だけ阿蘇の火山灰の土を使っている。それが料理をおいしくするキーワードの遠赤外線を90%の効率で出す。普通、万古焼の遠赤外線は80%なのに対して90%なので、うま味を鍋の中に残せるのです」(同)。万古焼の作者、デザイナー、四日市の料理人の人たちと組んで技術に磨きをかけている。

「セラミックスを削ったのは万古焼の業界からびっくりされた。これを削ろうと思うことがまずありえないといわれた。『空気以外はなんでも削ります』という心構えがあったからやったのかなと思う。チャレンジし続けるのはすごく疲れてるけれど、新しいものを考えている時はすごく楽しいです」(同)。

◆取材を終えて◆

山添社長はJリーグを目指したサッカー少年で、今でもサッカーをやっているというだけあって、目焼けた精悍な顔つきだ。5月に真空工業会に入会したのは真空ポンプなど真空機器関連の仕事を増やしたいと考えたからだ。「それだけでなく、今やっているエッチング装置のことや業界の景気の波みたいなのも含めて、いろいろな情報を得たいと思いました」という。

現在の悩みは社員不足だ。この地域には東芝の半導体工場や日本電装、トヨタ車体などの大手メーカーの工場があり、「大手が正社員募集をするとそっちに流れてしまう」という。現在、60人の社員のうち、20人がタイとベトナム人で、エンジニアリングの申請でビザを発給して、長い人で8年くらい働いている。「日本人の一流大学卒クラスの外国人が何人かいるが、日本語もペラペラだし、仕事も日本人よりできてしまう人もいる。今はそういった人たちに頼っている面もある」そうだ。

悲願の自社ブランド製品「サムライ」を立ち上げ、「空気以外なんでも削ります」という加工技術が多くの人々の目に留まった。その結果、チタン部品の加工依頼が舞い込むという好循環が生まれている。飛躍のチャンスが訪れたといえそう。